

清代一枚摺版画の編年的考察

青木隆幸（海の見える杜美術館）

一枚摺とは、版本ではない一枚物の版画をいい、最初期の作例は、8世紀半ばまで遡ると推定されている。その後、12世紀にはすでに豊かな一枚摺の広がりがあったものと推察できる。しかしながら、一枚摺は版本と異なり、作者、版元、制作年代などの基本情報が記されていないうえ残存作品が圧倒的に少なく、明代(1368-1644)までの作品は比較分類できるほどの量が確認できていない。

清代(1644-1912)以降の作品は、ヨーロッパや日本など中国を取り巻く周辺地域に伝存が確認されており、その様式や画題は多岐にわたっている。とりわけ雍正、乾隆期に蘇州とその周辺地域で制作された作品群には、西洋の遠近法や銅版画的手法が用いられたものや、長辺が1メートルを超える大型の風景版画、多色摺空摺の花鳥版画など、多種多様なものにわたっており、享受層は広く都市の富裕市民層に拡大し隆盛を極め、関係諸国にも輸出されたことが見て取れる。嘉慶、道光期には、簡略小型の作例がより多く残され一般市民への広がりをみせ、清朝末期には辛亥革命の速報として用いられるなど、メディアとしての役割も担っている。

これら中国の一枚摺版画に関しては、西洋美術や浮世絵との影響関係の指摘や中国版画史への編入などの論考があるが、それらは全体から見ると一部の作品を対象にしているにすぎず、「中国の一枚摺版画」という視点での研究はなされていない。また基本情報の共通認識が確立されておらず、制作地や制作年代の推定が研究者によって大きなずれが生じているものもある。例えば中国の北方で制作されたとも考えられる美人版画が南方の「蘇州版画」として紹介されていたり、制作年代の推定が50年以上離れている作品などがある。また、制作者や版元に関する研究も進んでいない。

このような基礎研究の遅れは、中国一枚摺版画の残存量の少なさと、さらに、それらの作者や版元、制作時期などを示す情報が稀であることに起因すると思われる。発表者は所属館において、作品と資料の収集に取り組み、清代を中心に明代や中華民国期それぞれにかけての50年前後に制作したと考えられる作品の確認作業に取り組み、1985年頃には約500点に過ぎなかったものが、2019年現在は約2000点となり、関係研究の文献資料も増加した。そこで本発表では、まず清代の一枚摺版画の制作年代の推定を試みる。手順としては、制作年代推定が可能な一枚摺版画を取り上げ、その基準作たる根拠を述べる。次に、これら基準作と、技法、紙、色料などに同時代性がみられる作品を抽出し、基準作に準じた同時代の一群を纏める。次に、風景、美人、物語、時事、遊戯など様々な一枚摺をそれら基準作と比較することで、清代の一枚摺版画を編年的に分類整理し、その全体像を提示したい。